課題　おせっかい

「梅干しの木」

水野たわこ

坂下律子（9）　小学生　父親は漁師
稲田希衣子（9）　転校生
坂下てい（61）　律子の祖母
坂下久（40）　律子の父親　漁師
坂下典久（15）　律子の兄
稲田順一（37）　希衣子の父親
佐藤きみ（68）　借家の持ち主
吉田真一（9）　律子と希衣子のクラスメイト

○　プラットホーム

昭和20年代ぐらいに見える風景。
ちょうど電車が到着したところ。
電車から、ひょろっとした痩せた男、稲田順一（37）が大きめの風呂敷を持ちながら降りてくる。
その後ろについてくるのは、稲田希衣子（9）。
安っぽいワンピースを着ているが、希衣子はその安物にそぐわないくらい綺麗な顔立ちをしている。
しかし、希衣子の顔はしかめっ面である。
風が吹き、希衣子の髪をみだす。

○　漁港

小さな村の漁港。作業所で数名の人々が魚の選別をしている。
その、選別をしている人のなかに、坂下てい（61）がいる。
その様子を見ているのは、坂下律子（9）

ていが、1匹の魚を袋に入れて、律子に渡す。

てい「律子、先帰って、これ煮つけてな」

律子、頷きながら魚を貰い、外に出る。

海の水は穏やかで光がきらきらと反射している。

律子が遠くをふとみると、先ほどの電車が海沿いの線路を走っている。

律子、にっこりと笑い、ステップしながら歩いていく。

○借家

借家の持ち主、佐藤きみ（68）に、4畳一間の小さな部屋に案内されている、順一と希衣子。

きみ「家賃は月始めに貰いに来るから」

稲田「はい」

きみ「（窓の外を指さして）あっちの道の角まがってずっと行けば風呂屋、野菜買うなら道をまっすぐ行って‥」

稲田「いろいろありがとうございます」
きみ「ああ、全然気にしないで・・（希衣子にむかって）お嬢ちゃん何歳？」
希衣子「（びっくりした顔したが）７、です」
きみ「べっぴんさんやね。お父ちゃんを助けて、頑張るんよ」
そう言いながら、希衣子に梅干し入りのおにぎりを２つ渡す。
稲田「…すいません」
きみ「東京からで疲れててるでしょ」
希衣子、もらったおにぎりをぎゅっと、抱きしめる。

○同　（夕方）
窓からは夕日に染まった空が見える。
じっとその空を眺めている、希衣子。
窓枠に、梅干しの種が２個ならんでいる。
稲田の声「お父さんちょっと外にでてくるからー」
希衣子「…」

稲田の声「聞こえてるのかー？」
希衣子「お父さんー」
稲田の声「なんだー？」
希衣子「私、海みてみたい」
稲田の声「なんだー？聞こえないぞ？」
希衣子「何でもないー」

○同じ頃、坂下の家
夕飯の風景。
希衣子と希衣子の父、坂下久（40）、
希衣子の兄、坂下輝久（15）、ていが、
茶ちゃぶ台を囲んでいる。
ちゃぶ台の上には、魚の煮つけ、野菜
の煮物が置かれており、ていがおひつ
からご飯をよそっている。
輝久がつまみ食いをしようとした手を、
久がぱちんと手をたたく。
輝久「いて」
久「母ちゃんにお参りしてから」
輝久「はいはい」

てい「ほれ、律子も手伝って」
律子、茶碗を並べるのを手伝う。
お膳がすべて整う。
久「じゃあ、」
4人とも仏壇のほうをむいて、写真にむかう。
4人「いただきます」
写真は、赤ん坊のころの律子を抱いている律子の母の写真が写っている。
仏壇の横には、ガラスケースに入っている市松人形が飾られている。

○小学校・外観（日替わり）
木造校舎がみえる。

○同・教室
生徒たちが座っている。律子もまた座っている。
壇上には、教師が立っており、その後ろにいるのは、希衣子。

黒板には、『稲田希衣子』と書かれている。

教師「じゃあ、あそこの席で」

希衣子は、律子の横にあった空いていた席に座る。

希衣子は笑顔もなく、その席に座る。

ちらっと、希衣子の横顔をみる、律子。

律子「（小声で）お人形さん、みたい…」

その声に気が付かないふりをする、希衣子。

○同・昼ごはん

希衣子、こっそりお弁当箱をあけて食べている。

クラスの男子吉田真一（9）がやってきて、

吉田「お前、東京からきたんだって？」

希衣子「（とっさに弁当をかくし）…うん」

吉田「東京ってどんなとこ？綺麗な建物とおいしいもんとかいっぱいあるんだろ？」

希衣子「え…あの…」
希衣子、弁当を隠そうとして、
床に弁当箱がおちてしまい、中にあった、ふかし芋が転がっていく。
吉田「あ…」
希衣子、だまって床に落ちた芋を拾おうとする。
しん、とする教室。
律子、とっさに自分の弁当を落とす。
昨日の夕飯の魚の煮つけが床にとびちる。その煮つけの汁が男子の服にかかる。
吉田「わあーー！」
律子「あーーどうしよ、どうしよ。雑巾もってきてよー」
クラスの子供達、みんな騒ぎ出す。

○帰り道
律子、ランドセルを背負いながら歩いている。その少し前に、薄汚れたリュ

ックを背負った希衣子が一人歩いてい
律子、希衣子にむかって走っていき
律子「お腹すかない？」
希衣子「（びっくりして）…うん」
律子、にやっと希衣子に笑いかける。

○海・岩場
岩場をぴょんぴょんと走っていく、律子。希衣子は、離れたところでみている。
律子「きいちゃん、こっちー」
希衣子、おそるおそる岩場にいくが、足がすすまない。
希衣子「りっちゃん、むりー」
律子「なんでえ、お嬢様やなあーー」
律子は、岩場にある貝を取り続ける。
希衣子「（律子をみて）…きれい」
波に反射する光と海の青がみえる。

○坂下の家
台所で、貝をゆでている律子と希衣子。

ゆであがった貝をざるにあけていると、
ていがやってくる。
てい「なんだ、それっぽっちか」
律子「ばあちゃん！　帰ってきたの？」
てい「お腹すいてんのか？」
律子「うん。（祖母が希衣子をみてるので）
あのね、きいちゃんっていうの」
希衣子「（おそるおそる）こんにちは」
てい「おにぎり、食べるか？」
希衣子、こくりと頷く。

○木陰の下
二人仲良く、梅干し入りのおにぎりを
食べていたが、希衣子は種をだして、
大事そうにポケットにいれる。
律子「なにしてるん？」
希衣子「…おいしかったから」
律子「うん？」
希衣子「取っとこうかなって」
律子「ふうん」

希衣子「変かな、変だよね…」
律子「…私のおかあちゃん」
希衣子「え？」
律子「海で亡くなった」
希衣子「そうなんだ」
律子「嵐に飲み込まれて、何ものこってない」
希衣子「…そっか」
律子「だから取っておきたい気持ちわかる」
希衣子、急に立ち上がり、地面を掘りだし、梅干しの種を埋める。
律子「何で？」
希衣子「わからない。したくなった」
律子「そっか」
希衣子「来年になったら、梅干しが生るかもしれないし」
律子「え？」
希衣子「梅干しの木」
律子「そしたら、梅干し食べ放題だ」
希衣子「そうだね」
律子と希衣子、笑いだす。　了